

仙台の伝統的な門松

正月の伝統的な風景の一つに門松があります。現在よく飾られている門松は、斜めに切った三本の竹をワラで巻くという形ですが、かつて仙台城下周辺で飾られていた門松は、これとはまったく違う形のものでした。そして、藩主が住む仙台城に飾られる門松は、実は根白石村(泉区根白石)の農民が付近の藩有林(御林)から切り出した材料で作られていたのです。

下の図は、江戸時代の版画の下絵に描かれた仙台城下の門松です。まさしく門のような形に松などを取り付けたものでした。

①真柱(しんばしら)

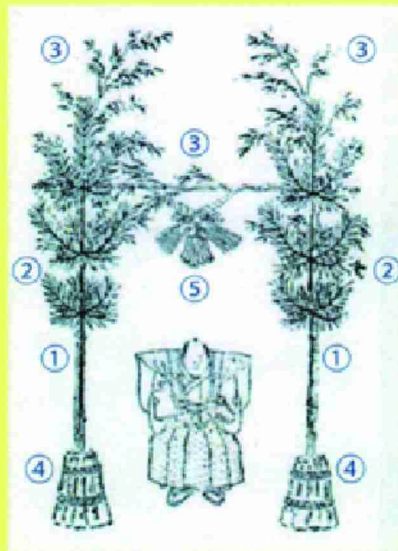
松などをくり付けるための支柱でおもに栗の木が用いられます。

②三階松(さんがいまつ)

3層に枝分かれした松で、現在でも正月の松飾りは三階の松が基本となっています。仙台城では五階、七階の松が使われました。

③笹竹

三階の松の上に取り付け、松と松をつなぐように横に渡すなどして使います。後者の場合、葉を落とした竹を用いることもあります。



④鬼打木(おにうちぎ)

3枚から12枚前後の板や割り木で、真柱の根元に巻き付けるものです。仙台城では3枚でした。また、巻き付けずに数枚を横向きに縄で結んで真柱の下の方に垂らすものもあります。

⑤ケンダイ

松と松の間には「ケンダイ」と呼ばれるしめ飾りを付けます。ケンダイの中央には、スルメや昆布、柑橘類、炭などの縁起物が取り付けられます。

○仙台城の門松と根白石村

仙台城でも正月には城内の門に門松を飾りました。寛文10年(1670)ころの様子を記した古文書によると、全部で42カ所分の門松の材料が用意されたようです。

この古文書では、門松の真柱の長さを1丈1尺から1丈3尺、すなわち3mから4mとし、さらに用いられる松は五階と記しています。見上げるような大きな門松だったことがわかります。

○根白石村の御門松上人

こうした仙台城で用いる門松の材料は、根白石村から納めるのが恒例となっていました。門松を納めるのは8つの家に限られ、その家の当主は「御門松上人(おんかどまつあげにん)」と呼ばれていました。

御門松上人たちは租税の一部を免除されるなどの特権を与えられていましたが、五階の松など大きな材料を集めるのには、毎年相当に苦勞したようです。



天明3年(1783)から4年にかけて発生した天明飢饉の状況を描いた絵に見える佐沼(登米市)付近の門松
(仙台市博物館所蔵)

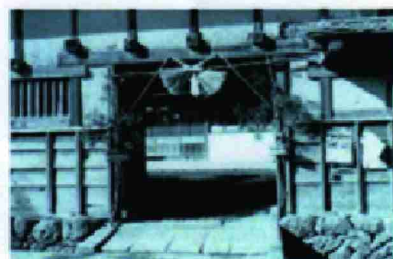
○根白石の門松

仙台城の門松の姿を描いた資料は発見されていません。しかし、仙台城に門松の材料を納めていた根白石の門松にその面影を見ることができそうです。

右の写真は昭和40年(1965)ころに根白石周辺で撮影されたものです。

上の写真に見える門松は、やや質素に見えますが、真柱、三階松、鬼打木、ケンダイといった門松の要素はしっかりと揃っています。

下の写真は、御門松上人の子孫の家で飾られていた門松で、鬼打木は、3枚の板が横向きに結んだ状態で真柱にくり付けられています。



*写真はいずれも『祭礼と年中行事』(仙台市歴史民俗資料館)より転載